

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：33902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23372

研究課題名（和文）社会構造の変化が恩送りの心理的メカニズムに与える影響の検討

研究課題名（英文）The effects of changes in social structure on the psychological mechanism of paying it forward

研究代表者

白木 優馬（Shiraki, Yuma）

愛知学院大学・教養部・講師

研究者番号：90845231

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、恩送り（pay it forward）と呼ばれる向社会的行動が、進化的には脆弱であるにもかかわらず、現代社会において少なからず観測される原因を明らかにすることを目的とした。具体的には、社会関係が広く流動的になった結果、恩送りの至近因である感謝の感情が喚起しやすくなった可能性について検討した。まず、感謝の手紙（サンクスカード）の分析を通じて、感謝による恩送りが連鎖的に生じる可能性があることを示した。さらに、横断調査及び実験的検討によって、関係が流動的である環境においては、こうした感謝の感情が喚起しやすい可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、現実社会において恩送りが連作的に生じうること、その恩送りは感謝の感情によって駆動されている可能性があること、そして特に社会関係の流動性が恩送りの至近因としての感謝の感情に寄与することが示された。社会的な構造の変化が感情を介して、その中で生じる向社会的行動の特徴にも影響を与えていることを示した本研究の知見は学術的にも意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the reasons why paying it forward, a kind of prosocial behavior, is observed in modern societies despite its evolutionary fragility. Specifically, I examined the possibility that gratitude, the proximate cause of ingratiation, is more easily evoked in societies with high relational mobility. First, through the analysis of gratitude letters (thank you cards), a chain reaction of gratitude and paying it forward was found. Furthermore, cross-sectional and experimental investigations showed that these feelings of gratitude may be more likely to be aroused in an environment with high relational mobility.

研究分野：社会心理学

キーワード：恩送り 感謝

## 1．研究開始当初の背景

日常生活の中で、私たちは家族・友人・他者に対して、親切や援助をして、お互いに助け合いながら生活をしている。こうした向社会的行動は、単に受け手にとっての利益になるだけではなく、送り手の心理的な幸福感を高める効果をもつ。向社会的行動のなかでも、他者から親切を受けたあと、その送り手に対してではなく、送り手以外の第三者にお返しをする行動を、特に恩送り (pay it forward) と呼ぶ。恩送りの具体例としては、新潟中越地震の被災者が、東日本大震災の被災者支援にかけつけた被災地のリレーや、飲食店において、前の客が次の客の料金を支払い、その次の客がさらに次の客の料金を支払うといったシステムの存在があげられる。これらをはじめとして、現実社会における事例は少なくない。恩送りという人々の善意の連鎖によって、受け手や送り手の心理的な幸福感が高まると考えられる。

しかし、人々がなぜこのような恩送りをするようになったか、その明確な理由は十分に明らかになっていない。恩送り以外の向社会的行動については、進化心理学の文脈で多くの検討がなされてきた。その結果、多くの向社会的行動は、短期的には損となるが、長期的には適応につながることで様々な研究によって明らかにされ、その進化的な獲得プロセスが実証されている。他方、恩送りに関しては、こうした進化的なプロセスで獲得される可能性は低いとされている。なぜなら、獲得した利益を受け渡すという恩送り行動をする個体は、他個体から搾取される可能性が高いためである。それにもかかわらず、現実社会において、恩送りの事例は少なからず観測される。そこで、いかなる原因がこの矛盾の背景に存在するかを明らかにする必要があると考えられる。

本研究では、恩送りが現代社会に存在する原因に関して、進化的環境と現代社会との社会的関係の違いに着目する。小集団で固定的な社会的関係を基盤としていた進化的適応環境に比べて、現代社会の社会的関係は広く流動的である。流動的な社会関係の中では、向社会的行動の送り手は、受け手からの見返りを期待しにくい。見返りの期待のない善意に対して、私たちは感謝の感情が喚起される。自身のこれまでの研究は、恩送りの至近因として感謝の感情が機能していることを明らかにした。以上の理由から、社会関係の変化が感謝の感情を喚起しやすくなったことで、進化的環境では不適応的である恩送りが生じやすくなった可能性があると考えられる。

## 2．研究の目的

本研究の目的は、進化的環境から現代社会にかけての環境の変化によって、感謝の感情が喚起しやすくなった結果、恩送りが生じる可能性が高まったという仮説を検討することであった。具体的には、他者との関係性が一時的・流動的なものであると認知する場合、受け手は感謝を感じやすいという予測を検討した。

さらに、これまでの研究からは、感謝によって恩送りが生じることが明らかにされているものの、実験的な環境の中での検討が主であること、現実には生じている恩送りが感謝によって駆動されているかは明確ではないという問題点がある。そこで本研究では、より生態学的妥当性の高いデータを用いて、感謝によって駆動される恩送りが連鎖しうるかという点についても検討することを目的とした。

## 3．研究の方法

本研究の申請時点では、恩送りを利用したカフェイベントを開催している介護老人福祉施設にて、フィールド調査を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、当該施設での調査実施が困難となった。他方で、当該施設では、施設職員間で感謝の手紙 (サンクスカード) の交換が継続的に実施されており、既存資料として分析が可能な状態であった。サンクスカードは、他者の善意ある親切や援助に対して贈られるものである。そこで、サンクスカードを、感謝及び恩送りの代替的な指標としてとらえ、カードのやり取りが施設内で広く伝播するかを検討することとした。具体的には、サンクスカードの交換ネットワークの構造を時系列に分析することで、カードが施設の部署内でのやり取りから部署間でのやり取りに波及・伝播していくかを検討した。

次に、クラウドソーシングワーカーを対象としたオンライン調査、および大学生を対象としたオンライン実験によって、社会関係の流動性が感謝の感情に影響を及ぼすかを検討した。横断調査によって、関係流動性の認知と感謝特性との関係を探索的に検討するとともに、関係の流動性を実験的に操作することで、シナリオ内で受領した向社会的行動に対する感謝の感情が変化するかを検証した。

## 4．研究成果

まず、サンクスカードの交換ネットワークについて、時系列ごとの分析をおこなった。2015 年 9 月から 2017 年 1 月までに交換された 2529 通のカードを分析の対象に、施設担当者の協力を得て、交換された時期によりカードを 4 期間に分割した。各期間内に交換されたカードについて、送り手および受け手、および施設内での所属部署の情報に基づき、ネットワーク図を作成した（図 1）。ノードの色は所属部署の違いを示し、ノードのサイズは出次数（カードを送った枚数）を示している。図 1 から、時期を経るごとに部署内でおこなわれていた相互の交換が、部署間に拡大していく様子が確認できる。この傾向は、入次数を基準として作成したネットワーク図においても確認された。以上の結果は、他の職員から受けた援助や親切が、感謝の感情を介して、新たな援助や親切、すなわち恩送りとして集団を超えて伝播していく可能性を示すものである。ただし、サンクスカードは、あくまでも感謝の言語的表出の指標であり、そのきっかけとなった向社会的行動の内容や程度については明らかではないため、結果の解釈の妥当性については慎重になる必要がある。

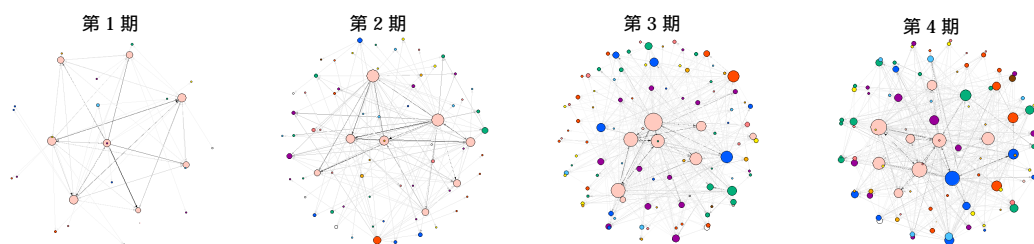


図 1 サンクスカードの交換ネットワーク

次に、関係流動性が感謝の感じやすさに与える影響を、調査及び実験によって検討した。横断的な調査の結果、理論的な予測通り、関係流動性の認知は感謝特性と正の相関（ $r = .30$ ,  $p < .001$ ）をもつことが明らかになった。その影響過程について、他の変数による媒介を検討したところ、関係流動性は直接的なプロセスに加えて、自尊心を介した間接的なプロセスによって感謝特性を高めることが明らかとなった（図 2）。

大学生を対象としたオンライン実験によって、この結果が再現されるかを検証した。職場関係の流動性（高・低）をプライミングによって操作したのち、職場の同僚から親切を受領する場面を提示した。そのときに同僚に対して喚起される感謝の程度を測定したところ、プライミングの操作は感謝の喚起の程度に影響しないことが明らかとなった。したがって、先の横断調査の知見は、本実験においては再現されなかった。

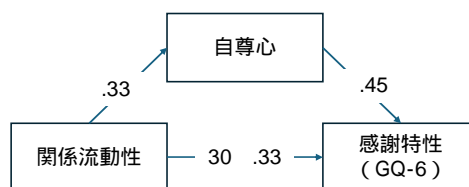


図 2 関係流動性が感謝特性に及ぼす影響

以上の結果は、関係流動性が高い環境では、恩送りの至近因である感謝の感情を感じやすくなることを示すものであり、本研究の仮説は部分的に支持されたと考えられる。ただし、一時的なプライミングでは感謝に対する効果がなかったことから、単に流動性を認知するだけではなく、流動的な環境に対して心理・社会的に適応していく結果として、感謝を感じやすくなる可能性が考えられる。たとえば、関係流動性の高い社会、すなわち対人関係が自由競争的に構築される社会においては、関係的な価値の指標である自尊心を高める必要に駆られる。他方で、自尊心は、周囲の他者から受容されている程度をフィードバックするため、結果的に他者に対して感謝する機会が増えるという可能性が示唆される。これらのプロセスは、当初の予測とは異なるものの、社会関係の流動性の違いが、恩送りの至近因である感謝の感情に影響する可能性が示唆された点は本研究から得られた重要な示唆である。

本研究は、社会関係の構造の変化によって、感謝が感じられやすくなった結果、恩送りが生じやすくなった可能性について検討した。サンクスカードの分析によって、これまでの研究と比べて生態学的妥当性の高いデータから、恩送りが伝播していく様子を可視化できたことは、現代社会において少なからず恩送りが生じていることを示す点で意義があると考えられる。調査及び実験的検討からは、こうした感謝による恩送りが、現代社会の流動的な関係の在り方に起因する可能性が部分的に支持された。社会的な構造の変化が感情を介して、その中で生じる向社会的行動の特徴にも影響を与えていることを示した本研究の知見は新規性があり、学術的にも意義があるといえる。今後、本研究から得られた知見をもとに、縦断的検討などを通じて仮説モデルの検証を重ねていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 白木 優馬	4. 巻 63
2. 論文標題 8. 企業と消費者の関係における感謝	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 繊維製品消費科学	6. 最初と最後の頁 224 ~ 229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11419/senshoshi.63.4_224	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 白木優馬
2. 発表標題 感謝特性が物質主義傾向に与える影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白木優馬・小山智彦
2. 発表標題 職場における感謝のネットワーク 2500通のサンクスカードの分析
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白木優馬
2. 発表標題 些細な親切の送り手が推測する受け手の感謝
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------